

江戸時代、津山の町は常に洪水の危機と隣り合わせで、吉井川堤防に守られることにより成り立っていました。

そうした中、大きな水害は人々によって語り継がれ、江戸時代においても「丑年洪水」とか「黒沢水」などが挙げられますが、寛政7年（1795）8月29日未明に津山城下を襲った洪水は、このように語り伝えられている大洪水の1つになりました。

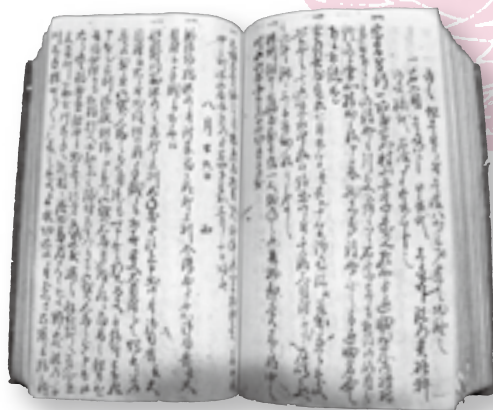
当時の町奉行だった増見右門による『町奉行日記』の記録では、8月23日から連日雨が降り続き、29日未明には大洪水となったと記されています。8月27日には、まず兼田川（加茂川）が満水となり、渡し船の運航が停止。翌28日には院庄川（吉井川上流）が満水となり、同じく渡し船が止められています。しかし、この時点ではまだ城下町全体に及ぶ洪水には至っていない様子で、町奉行も通常通り仕事を終えていました。

ところが、翌29日になると日記の書き出しから洪水の記録になります。満水のため、早朝に鍛冶場橋（今津屋橋下流にあった橋）の往来を止めたことが今津屋から届けられ、続いて船頭町付近が洪水との知らせが大年寄から届きます。増見右門は、重役たちに連絡するとともに、直ちに現場に駆け付けると、川土手では横町ごとの雁木（石段）のある場所から勢いよく水が流れ込んでいました。

土俵での対応を指示した右門は、馬に乗って町々を見回りますが、材木町・伏見町付近は通行が困難なほど水があふれていました。宮川橋西

## 津山城百聞録

### ～寛政の大洪水～



▲町奉行日記（寛政7年8月29日）

おわびと訂正  
3月号掲載の「江戸一目図」屏風の写真は左右反転しておりました。おわびして訂正いたします。

詰めの大番所を過ぎて林田方面に進むと、中之町まで行った所で洪水のため全く進めなくなり、土手筋に出て西新町まで行きます。すると、そこから下流では水が土手を越して流れ込んでおり、土手の状態も判断できないような有様でした。

右門は、それぞれの場所で舟を出動させ、老人や子ども、病人の救出を命じています。しかし、道路幅の狭い船頭町や河原町では舟が入れない場所もあり「半切」という浅い桶をつなぎ合わせ、舟の代わりとして救出に当たらせる場面もありました。

また、午前8時過ぎには鍛冶場橋が流失しており、東新町や伏見町では床上3～5尺（約90～150cm）まで浸水した家もありました。こうした状況は城下町の西部においても同様で、家屋の流失や損壊の被害は広範囲に及び、城下町全体を覆う大洪水となったのでした。

つやま  
広報

4月号  
平成19年  
2007  
630号

編集・発行（毎月10日発行）  
津山市企画部市長公室（市役所3階）  
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地  
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152  
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。  
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>



広報紙がリニューアル！津山市が一層明るくはすむように、というコンセプトで作っていただきましたがいかがでしょうか？編集室ですでに古株になってしまいました、新たな気持ちでみなさんに広報紙をお届けしていきます！（X）



3月は別れ、4月は始まり。春の季節は天候と同じく、変化が大きくて落ち着きませんね。しかし、学生や社会人にとっては、新年度の4月が1年の始まりのようなもの。気分一新して、新しいスタートを切りましょう。（元）



つぶ・や・き

編集室

広報担当から異動にすることになりました。広報作成に関わった4年間は、苦労と楽しさ、多くの出会いと感動がぎっしり詰まった濃い4年間でした。取材に協力してくださった皆さん、どうもありがとうございました。（e）



### 2月中のひとの動き

人口	110,937人	(前月比△26)
男	52,972人	(同△7)
女	57,965人	(同△19)
世帯	43,445世帯	(同△19)
転入	241人	転出 254人
出生	78人	死亡 91人

（3月1日現在）



広報つやまは、環境保護のため古紙配合率100%再生紙、大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください

